

今、農村・農業工学に求められる生物分類スキルのあり方とは？

— 在地のパラタクソノミストへの誘い —

What's kind of taxonomic skill necessary for rural and agricultural technocrat, right now ?

- A temptation for elementary parataxonomist -

日鷹 一雅

HIDAKA, Kazumasa

1. はじめに

1999年12月に始まった農業基本法の改正、土地改良法の改正、自然再生推進法の制定、農地・環境・水保全施策の展開、一昨年度の有機農業推進法の制定、農林水産省の生物多様性国家戦略の策定、環境省の生物多様性国家戦略の第三次改訂である。どの政策も日本の農業・農村の持続可能性の低下を懸念しての農業環境政策の導入であり、「環境や自然にやさしい」「生物多様性にやさしい」農業技術への転換を推奨している。今こそ、農村における生きものを農村生活者や農村を取り巻く一般市民が正しく理解しボトムアップ型の事業が推進されることが求められている。

生物種を正しく理解する第一歩は何なのであろうか？ それは農村を対象にしているからと言って、とりわけ王道があるわけではないだろう。そう「学問に王道なし」と同様であるように、生きものへの理解も何も特別な技術があるわけではなく、人間側の個々人の技能（スキル）を磨くのが常道であろう。技能だから個人の個性に応じた発達も期待できる。環境教育的に言えば、まず私たちの身近にいる生きものの存在に、気づく、名前、分類や彼らの生活を理解する、そして私たちとの関係性について考えをめぐらすことへの技能の発達である。これは人付き合いでも同じで、生きものとのつきあいでも、種として彼らを同定し名前を知ることが第1段階から第2段階以降かの順番は抜きにして、大変重要なスキルに違いない（日鷹 1987）。

しかし、このような農村の生態系、生物多様性を保全あるいは再生する上で、ボトムアップ型の生物調査が行われているが、現場で生じている一つの問題は種の同定がままならない状況である。「気づき」からなかなか種同定にはつながらず、時には「類」とじっぱーからげにされてしまうこと日常茶飯事である。ここでは博物学や生態学の歴史を紐解きながら、非生物学者が大多数を占める本学会において、今どのような生物分類の技能が求められているのかについて、パラタクソノミスト（Parataxonomist）をキーワードに日頃の考えをここに綴り、議論を喚起する発展的なコメントにしたいと思う。

所属：愛媛大学農学部・附属農場 College of agriculture, College farm, Ehime University

キーワード：準分類学者・生物多様性・環境教育・生物調査

2 農山漁村に生きる「在地の生物種分類スキル」

実は私たちは農山漁村で自立自耕して生活するプロフェッショナルの技能の中に、確かな生物種分類を見出すことができるが、そのことに私たちは気づかないことが多い。魚種がわからない漁師は見習いを除けばいないだろうし、ベテランの釣り人でも魚種を正しく分類することはできる。今、田んぼ生きもの調査で生物多様性という言葉や生物分類に手を焼いている生産農家たちも、まさか栽培している植物の種同定はおろか遺伝的系統（栽培品種）の技能は誰でも有しているはずである。

近代生態学の教科書で世界でもっとも普及しているのは、C.J.Krebs(1972初版)のものであるが（日鷹 2007）、人類の食料獲得と学問としての生態学“Ecology”との結びつきをこう表現している。古来、人類は日常の食料獲得のために、資源とする動植物種が「いつ」「どこで」「どれくらい」発生しているか、またそれらを予測するためには「なぜそうなのか」について考え抜きながら行動してきたのだ。種を正しく認識することは、このような人類古来の生活基盤となる生態学的行動の大切な一技能であり、それは博物学（わが国では本草学）が歴史上担ってきた。例えば、伝統的色彩の残る焼畑における民族植物学的調査によれば、宮崎県椎葉村に現存する事例として、地元の方言名で分類学的にほぼ正しい植物分類を古老の女性が技能として継承し、焼畑栽培や生活上の資源利用に活かしている（日鷹 2000）。近代生態学の祖C.Elton卿は、生態学を“Scientific Natural History”と呼んだが、在地の農山漁村のプロフェッショナル達はそれを生活の中で実践し日々技能を磨いてきたのである。

3 生物多様性保全プログラムにおけるパラタクソノミスト達の活躍

パラタクソノミスト（parataxonomist）とは和訳されているが、厳密には「学術標本、サンプルを正しく同定し整理する能力を有する者で、環境調査、環境教育において必要とされる人材」（北海道大学総合博物館 2009より）と考えられているようだ。焼畑の婦人に代表されるようなプロの生物分類学者ではないが、生物分類の達人がいるが、彼らはどう呼ぶにふさわしいのであろうか。その場所で生活していく上で、その場所だけかもしれないが生物分類のプロと呼べる人々を「在地のパラタクソノミスト」と呼んではいけないのだろうか。いや「パラタクソノミスト」では不十分にさえ思ってしまうのは、彼らの巧妙な動植物との生活資源利用上の駆け引きや、先祖伝来、あるいは自分の家族、集落の永きにわたる自空間的な物語を内包している事を肌身で感じた事があるからであろうか。

わが国でパラタクソノミストというと分類学者とその取り巻きの愛好家での所持に終わっている状況にあるが、世界の生物多様性保全の先進地では現地で生活する人々がパラタクソノミストとの素養を習得し、熱帯林保護などで活躍している事例はよく知られている。

4 論点：今求められる農村・農業工学流パラタクソノミストとは？

今求められるパラタクソノミストの必要条件とは本学会ではいかなるものであろうか。少なくとも、種同定に偽装行為はあってならない。教育的配慮は欠いてはならないであろう。なぜなら「自然は正直で、偽装でごまかせばそれなりのしっぺ返しを受ける」からに他ならない。山里海により多くの在地の準分類学者が発生していくことを望んで止まない。